

# 筑波技術短期大学学生募集ポスターとデザイン教育 — 聴覚障害学生による視覚障害に配慮したポスター制作 —

筑波技術短期大学デザイン学科

生田目 美紀

要旨：学生の社会参加型プロジェクト教育として、本学デザイン学科学生と共に、筑波技術短期大学学生募集ポスターの制作を行った。チャットプレストなど制作前段階の情報共有・作品の第三者評価を学生にフィードバックし制作意図の伝達状況を確認させる等、コミュニケーションデザインを体感できる教育方法の開発を行った。本編では聴覚障害学生の表現力、発想力、ヴィジュアル・コミュニケーション能力を向上させる新しいデザイン高等教育の理論構築へ向けたデザイン教育の実践報告を行う。

キーワード：デザイン教育、聴覚障害教育、イメージの具現化、社会参加型プロジェクト、筑波技術短期大学学生募集ポスター

## 1. はじめに

本編は「障害に配慮したヴィジュアル・コミュニケーション活動の支援」\*1という一連の活動の中から筆者が担当したデザイン教育の部分に焦点を当てて報告するものである。

## 2. 背景：デザイン学科教育システムについて

筑波技術短期大学デザイン学科には、伝達デザインコースと生産デザインコースがあり、学生数は1学年10～12人である。2年次からは各コース5～6人のグループに分かれて専門授業を行っている。三年間の課程終了後は社会人としてデザインに関わる仕事をするようになる。

このように、少人数制の教育システムに則りながら、社会に羽ばたく手前の学生を扱う教育機関である本学におけるデザイン教育の特徴は、1：少人数制による教育環境の特色を生かす教育方法として、協調による全体的な目的意識の共有を条件とする相互啓発を基盤とすること。2：作品評価に関するフィードバックを学習者自身が社会的に体感できるような配慮と支援を行うこと。<sup>1)</sup>である。

## 3. 経過：教育実践プロジェクトの立ち上げ

1999年9月～2001年6月の間にデザイン学科学生を対象に実施したデザイン教育実践のノウハウをもとに、平成13年度「障害に配慮したヴィジュアル・コミュニケーション活動の支援」というプロジェクトを立ち上げた。

このプロジェクトは、本学デザイン学科学生のデザイン案を基に、筑波技術短期大学学生募集ポスターを制作するものである。制作者である学生には、大学の特色やアイデンティティ (Identity) を再認識してもらうことか

らはじめ、視覚障害に配慮したデザインについて考えながら、作品としてまとめあげてもらった。最後にアンケートで得た作品に対する第三者評価を制作者 (学生) にフィードバックすることで、教官と受講生の枠を超えた社会的なコミュニケーション活動を実感させるように工夫した。

プロジェクトの結果、以下のような成果が得られた。

- ・ 全学的共通理解に基づくアイデンティティ確立の可能性
- ・ 大学に対するオーナーシップ (Ownership) \*2の全学的相互啓発
- ・ 教育成果の社会的周知

学生募集ポスターの教育的展開を図った結果、教育だけでなく、組織の意識向上や教育の社会還元に結びつくプロジェクトとなった。<sup>2)</sup>

## 4. 筑波技術短期大学学生募集ポスターについて

### 4. 1 本学デザイン学科学生の特徴

「コンピューター・グラフィックス基礎演習」の授業を通して感じることは、細かいトレースなどの作業に集中力を維持して取り組むことができる学生が多いということである。また、「伝達デザイン論・演習A」で行ったデジタルポエムという課題からは、イメージを具現化する能力が高いということがうかがえた。

このような学生の能力特性はイメージ訴求とともに緻密な技術が要求される本学学生募集ポスターの制作に適していると思われる。

### 4. 2 本学学生募集ポスターの特徴と学習内容

本学学生募集ポスターの特色は文字情報がかなり多

いということである。通常ポスターというメディアは、最低限の文字情報量で最大限の興味を誘発するように設計されるが、本学学生募集ポスターの場合は、聴覚部・視覚部、両部における推薦入試・一般入試・相対話入試・社会人入試等の全入試スケジュールの告知を兼ねているためポスターの常識を超えた文字量になっている。

しかし、この特性は文字揃えや文字間の詰め、フォントやフォントサイズといったグラフィックデザインにおける文字の基本を教育するのに最適な教材になるのである。カーニングやトラッキングといった文字間隔の微調整は、自分の目だけが頼りの緻密なデザイン技術である。文字量が多くなればそれだけ作業も増え、大変な労力となるのであるが、本学のデザイン学科学生には、この作業に対する適性がある。

本学学生募集ポスターのもう一つの特徴は、情報認識が異なる人々を同時にターゲットにしなければならないという点である。つまり、画像などイメージ情報から内容を読み取る能力に長けている聴覚に障害がある人々と、画像情報よりも文字情報を丁寧に扱うことを求める視覚に障害がある人々を対象としてデザインすることが求められているのである。

デザインを担当する聴覚障害学生はこの課題を通じて、視覚障害という異なる障害に対して調べ考え、デザインで解決しようという努力をする。それと同時にイメージ訴求をどのように両立させるか頭を悩ませるのである。制作に関わるこのような知的活動を通じて、学生は、情報デザインおよびコミュニケーションデザインを理解することができるはずである。

## 5. デザイン教育の報告

### ・学生がまとめた本学の特徴

日本で唯一の聴覚障害者、視覚障害者のための大学／わかりやすい授業／小人数制クラス／バリアフリーの施設

### ・学生がまとめた本学のアイデンティティ

障害をものともしない／新しい自分発見／個性がある／明るい／豊かな交流

### ・学生がまとめた視覚障害に対するデザイン配慮

明朝体を使わない／文字は大きく／文字と地はハッキリしたコントラストをつける／赤と緑、白と黄色、黒と茶などの色の組合せを避ける／文字の背景に図柄を入れない

### ・初期デザイン

本学の特徴、アイデンティティ、視覚障害に対する配慮について考えた段階で制作した初期デザイン案は、学科専攻が8つあるという説明的な表現と背景と文字の扱いにデザイン的な制約を設けて表現していることが分かるものの、それら以外は主張を感じることができないようなデザインであった。(図1参照：左側作品)

### ・デザインコンセプトとデザインイメージ

仕入れた知識等をクリエイティブな活動に利用させるために、企画書形式でこれまで考えたことを整理すると同時に、デザインコンセプトとデザインイメージについても各自まとめるように指導した。

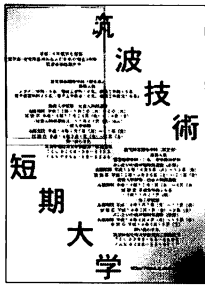
各作品のデザインポイントを表1にまとめた。

### ・最終デザイン

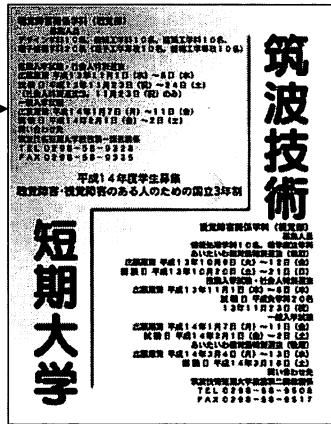
企画書に記載されている学生の意志を手がかりに、個別指導を行った。(図1参照：右側作品)

表1 平成14年度作品のデザインポイント

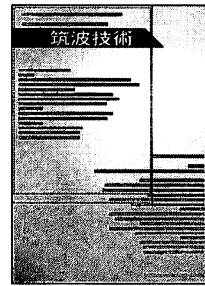
	デザインコンセプト	デザインイメージと具体的表現案
A	暖かい環境と輝く未来	温和なやさしい色で暖かさを表現、青い海のような穏やかなイメージも加える。光で輝きをあらわす。
B	明るく元気よく！	聴覚部の4学科5専攻、視覚部の3学科を表現。オレンジや淡い黄色で明るさと元気を表現する。
C	希望や夢を与えたい 希望や夢を持って欲しい	透明感のあるグラデーションで爽やかさを、レインボーの色のシャボン玉で新しい発見・夢や希望を表現する。明るさ、暖かさを感じさせる光の表現に挑戦する。
D	素晴らしい21世紀	手前から奥へ走る光線のような効果線でスピード感を表現。余計な情報は省いてスッキリとスタイリッシュに仕上げる。
E	自立できる明るい未来	しっかりとした土台に両足で力強く立つイメージ。大きく明るいデザインで将来を表現する。
J	空のように広い遊び心と 羽ばたくもの	青く広いさわやかな空に羽ばたくものがある。大学と学生の関わりをイメージしてデザインする。



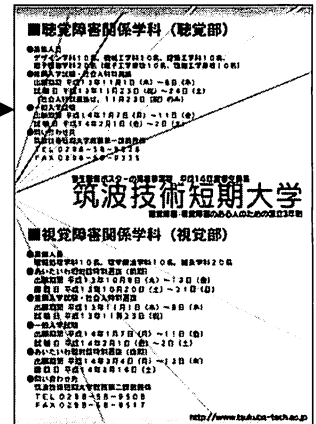
作品A：初期デザイン



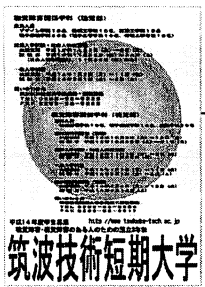
作品A：最終デザイン



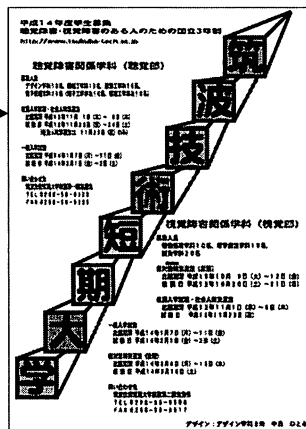
作品D：初期デザイン



作品D：最終デザイン



作品B：初期デザイン



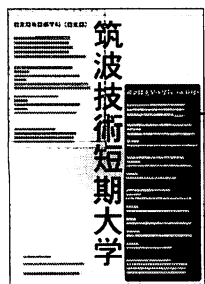
作品B：最終デザイン



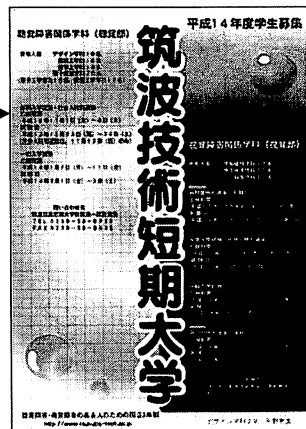
作品E：初期デザイン



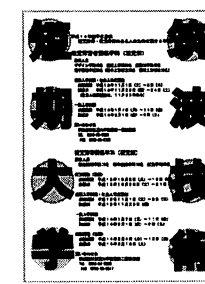
作品E：最終デザイン



作品C：初期デザイン



作品C：最終デザイン



作品J：初期デザイン



作品J：最終デザイン

図1 デザイン指導後の変化

## 6. 研究の目的と教育実践について

聴覚に障害がある学生に対する、新しいデザイン高等教育の理論構築を目的として本プロジェクトをすすめてきた。

プロジェクトを通じて得た、聴覚障害学生の表現力や発想力、ヴィジュアル・コミュニケーション能力を向上させるための具体的な教育方法を以下に挙げる。

制作の背景になる知識を構築する段階では、情報の共有化と目的意識の共有化に重点をおき、協調による相互啓発の基盤を作ることが重要である。少人数制の授業の場合、制作初期段階でグループ活動を実施することは、その後の個人制作段階で刺激を受けながら個性を出そうという意識が芽生え、視野が狭くなり展開に苦しむというようなスタンドプレーによる行き詰まりを回避できる。

作品完成を終わりにせず、最終作品に対する第三者評価のフィードバックを得て自分の企画内容と比較確認することが大切である。このフィードバックは良し悪しや好き嫌いの評価のみではなく、できるだけ具体的な内容に関するものが望ましい。自らが意図した事が相手にどのように伝わったかということを確認することは、デザインの基本的役割に立ち返ることであり、ここで学んだことは次の作品に生きてくる。

デザインのように正解がない分野における少人数制の授業の場合、教官の評価に絶対性を持たせることは、教官のコピー学生を育成するという危険がある。特に聴覚に障害のある学生の場合は、周囲の評価や情報が自然に入ってくる機会が少ないので、配慮が必要であろう。学生にできるだけ多くの第三者評価をフィードバックし、作品を介して第三者とのコミュニケーションを経験してもらうことが新しい感性をのばすことに直結する。

このように、一つ一つのコミュニケーションを大切にすることがヴィジュアル・コミュニケーション能力を向上させることにつながる。

表現力や発想力を向上させるためには、然るべき段階で知識の創造的利用を促すような課題が必要である。企画書フォーマットを準備し、最低限まとめなければならない内容を整理させることは有効である。しかし、企画書フォーマットを渡すだけでは効果はない。学生が抱いている漠然とした内容やイメージを文字としてまとめるためには、コミュニケーションをとりながら本人が表現したい事を明確にしていくような指導が大切である。

デザイン制作における指導では、まずデザインの基本論理に基づくポイントから指導を行う。人間の生理的な視覚認識に基づく指導はデザイン教育の基礎であり普遍的な意味合いを持つ。学生は少しの配慮で大きな変化が起きる事を実感できる。基本を踏まえた後の個性表現に

関しては作品に直接手を加える指導ではなく、本人の意識を高め次の展開に向けてみずからが飛躍できるようにコミュニケーション中心で行う事が基本である。

社会参加型のプロジェクト教育は、周囲の協力と理解を得ることができれば、学生のみでなく多くの人々にデザインの役割と意義を理解してもらうことができる。筑波技術短期大学学生募集ポスターを題材とした「障害に配慮したヴィジュアル・コミュニケーション活動の支援」プロジェクトは本学の協力と理解により、より大きな成果を上げることができた。

これらの教育実践から得た教育方法は、聴覚に障害がある学生に対する新しいデザイン高等教育の理論構築にむけた基盤整備となるであろう。

## 7. おわりに

### 7.1 展望

本学学生募集ポスターを本学学生にデザインさせることは、長期教育目標というスタンスに立っても意義のある事である。現在、障害に配慮したグラフィックをデザインできるデザイナーは数少ない。本学デザイン学科の学生は障害に関する論理教養学習の機会も与えられているし、意識も高い。制作でもこのような機会を準備することで、これからの社会になくってはならないデザイナーの育成が可能である。このようなデザイン教育は本学ならではの特徴的なカリキュラム開発に結びつく。

### 7.2 目標

在学中に大学に対し愛着と誇りを持って学生生活を送ることは、教育効果だけでなく人格形成の面からもプラスの結果を生み出すはずである。デザイン学科以外の学生にもぜひ挑戦してもらうことが今年度の目標である。

## 参考文献

- [1] 生田目美紀, 永井由佳里: 聴覚障害学生がコミュニケーションデザインを体感できる教育実践と展開. 筑波技術短期大学テクノレポート8(2): 27-33, 2001.
- [2] 生田目美紀, 永井由佳里, 北川博: 障害に配慮したヴィジュアル・コミュニケーション活動の支援1. 筑波技術短期大学テクノレポート9(1): 93-97, 2002.

## 注釈

\*1 筑波技術短期大学平成13年度教育改善推進プロジェクト

\*2 “持ち主だという気持ち” という意味で使用

## Recruitment Poster of "Tsukuba College of Technology" and Design Education — Helping Hearing-impaired students understand visual-impairment —

NAMATAME Miki

Department of Design, Tsukuba College of Technology

**Abstract :** This is a report of the development of the recruitment poster used for attracting new students to "Tsukuba College of Technology". We have developed teaching methods by using this poster.

I supported students' communication activities during the design process, while our college also cooperated with the students.

The teaching methods of design for hearing-impaired students are: -sharing knowledge, -giving evaluation feedback, -support in expression of ideas.

These teaching methods help in the development of expression, creation and visual-communication skills for hearing-impaired students in Design Education.

**Key Words :** Design Education, Educational Method for Hearing-impairment, Expression of Ideas, Society Project, Recruitment Poster